

いようせごみに出すし」休憩を挟んで作  
 キ龍をくたくたもつ私。た。お。妹。の。

い声で尋ねた。「ダンスの中に擦った跡？」

かき出さず量田のこ吉、利殖、いふふふ

あったのかもしれない。多少気味悪く思っ  
た。「はい、はい」。> 向い振に方の声全員

業中、ふいに妹の小さい悲鳴が聞こえた。

い擦れ跡があった。まるで何かが座り込んだ。

一山折り、

だ 跡 の よ う | 部 屋 に い た | た が、そ ん | み た い な の | 業 を  
**作 業 も あ ら** | れ る そ の 光 | く。扉 を 開 | タ ン ス の 中 | し の

「**引っ越し作**見ないから？」母が軽った。「い込む。」

自分の	のまふち。たいに中のこぶおくこ跡が擦れこ して思い出した。真っ暗な内部の高揚感、少 る。そ	め開き直、いゝ中くなさんだ、た。た。け 忘れていたのか不思議だった。小学生の頃、 今まで	の今また。うし田い思もてたこと好きが大 と、粗大ゴミのシールが貼られたそれが目に 回す	見を習得の分目たこなさんから、り、わ終か 筋が現れる。紙一枚分くらいの隙間から放た の光に	方の上のところまで置く慣が目らひれそ。 の跡をなぞりながら、18年間を思い返した。
-----	---	--	---	---	--